

### 第3回 校長会議あいさつ

R.5.5.25 稲垣

命溢れる万緑の時を迎えました。中学校では修学旅行や新入生の部活動参加が始まり、多くの小学校で運動会も催されました。前夜までの雨で一面水浸しの運動場を、早朝からスポンジを手に水抜きをしてくれた先生方がたくさんいたことを聞き、頭が下がる思いでした。

本日は、昨今の教育施策についての所感です。教育機会均等の原則に基づき、義務教育施策は、全ての児童生徒に公平であるべきです。しかし、近頃、経済格差が教育格差につながりそうな兆候が窺われます。保護者負担を前提とする部活動の地域移行の提言や、家庭個々の経済事情への配慮の不足したラーケーションは心配になります。教育委員会としては、子どもたちや保護者の実態と乖離した施策にならないように努めていきたいと思えます。

令和元年10月、文科省は、幾つかの条件を満たせば、フリースクールに通うことを出席と認めることができる旨の通知を出しました。現在本市でも、その運営状況を精査し、出席扱いを認めているフリースクールもあります。不登校に苦しむ子どもたちに、多様な受け皿を用意して、元気を取り戻させていく方針には大賛成です。社会的自立に向けてのビジョンに基づいた別ルートを備える施策には賛同できます。川崎夢パークはその最たるものと言えそうです。その一方で、昨今の肥大化する不登校対応の中には、首を傾げたくなるものも見受けられます。一部の通信制学校の緩慢な単位認定や、子どもが学校に来さえすれば何をしていても良いという、大いなる誤解につながりそうな校内フリースクールは、どうにも首肯できません。

本市の中学校でも、不登校傾向の生徒が登校した際の学級以外の居場所（校内教育支援センター）は、整えられています。しかし、校内フリースクールの中には、学級復帰を目的とせず、単に生徒のストレスを緩和させることにより、登校することだけを最優先しているものもあるようです。さらには現学級との往来も生徒任せとなっており、本人は言うまでもなく、通常学級に学ぶ生徒たちの安易な逃避傾向を誘発することにもなりかねません。また、同一空間内での特定生徒の特別扱いは、生徒集団内に疎外感を発生させます。よって通常学級に学ぶ生徒たちとの人間関係のひずみも危惧され、生徒集団の一体感や所属感が低下することも考えられます。件の校内フリースクールの発想は、不登校が大きな社会問題として苦慮されたあげくに、登校するという表面的な解決で問題を糊塗しているように感じられるのです。

学校教育の本来の価値、集団生活の中でこそ身につけさせなくてはならない資質、すなわち社会的自立に不可欠な心情の育成を無視して、教科の知識理解のみ、あるいは高校入試に向けた学力だけがつけばいいといった誤解もはびこりつつあります。子どもたちの未来を拓く力を身につけさせるという原点に立ち返って、学校教育の本質を再確認すべきと考えています。